



'96春日井市民第九演奏会

とき 1996.12.1 SUN 午後3時開演 春日井市民会館

主催 春日井市、春日井市教育委員会、'96春日井市民第九演奏会実行委員会

共催 春日井市交響楽団、春日井第九合唱団

後援 中部大学、中部大学女子短期大学、中日新聞本社

ごあいさつ



春日井市長 鵜飼 一郎

年末の恒例行事となりました春日井市民第九演奏会に、ようこそお出かけくださいました。今年も残すところあと一カ月、皆様それぞれに思い出深い一年であったことと思います。ひととき、「第九」の調べを聴きながら新たな年に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

今年で4回目となりますこの演奏会は、平成5年12月、市制50周年記念事業のひとつとして開催して以来、文字どおり、市民による手づくりの演奏会として親しまれてまいりました。師走の訪れとともに全国各地で第九演奏会が開かれますが、わがまち春日井の「第九」のように、合唱から管弦楽までほとんどが市民で構成される演奏会は、他の都市にも余り例がないと思います。魅力ある市民文化の創造をまちづくりの一つの柱としているわが市にとりましては、誠に心強く喜ばしいこととございます。

今日にいたるまでの、春日井市交響楽団と春日井第九合唱団を始めとする、関係各位のご努力とご熱意に感謝申し上げますとともに、本日の演奏会にお集りいただいた市民の皆様の音楽に対する情熱に、心から敬意を表します。

今回は、指揮者の高橋さんを始めソリストの皆さん全員が音楽大学・大学院在学中、あるいは修了されたばかりの方々です。21世紀を担う若い音楽家のエネルギーあふれる演奏と、春日井市交響楽団と春日井第九合唱団とのすばらしい共演を、心ゆくまでお楽しみください。



'96春日井市民第九演奏会実行委員会会長
中部大学長 山田 和夫

本日もまた、みなさまおそろいで春日井市民第九演奏会にようこそおいで下さいました。昨年の「ニューヨークによる春日井第九」の好評を受けて、今年は新たに、東京芸大4年生の高橋直史さんを指揮者に、現役 of 学生と研究生のみなさまをソリストにお招きして、「21世紀春日井フレッシュ第九」を企画いたしました。新世紀を前にした私たちは、新しい価値を持つ新しい世界の創造を絶えず試みていなければなりません。それは、日々のこうした演奏会においても同じです。音楽が素晴らしいのは、常に生まれたばかりの嘘のない真実の響きを聞かせてくれることにあります。すなわち、音楽を聴くことによって、いま一番新しい世界を私たちは共に生きることができるのです。さらには、新世紀に生きる明日の春日井のたくましい姿を、おなじみの春日井市交響楽団と春日井第九合唱団の熱意溢れる演奏に感じることもできましょう。その意味で、年末恒例の「春日井第九」は、この幸せであった1年に感謝し、新しい年を祝う格好の機会でもあります。

本日の「春日井第九」の成功を機に、新世紀の若き騎士たちである高橋直史さん、湯川晃さん、泉良平さんと、未来の期待の星である林正子さん、穴澤ゆう子さんのさらなる飛躍を願うものです。この演奏会にご尽力いただいた多くのみなさまに感謝申し上げますながら、一年ぶりのあの懐かしい「空虚5度」の響きを待つことにいたしましょう。では、ごゆっくり、お楽しみください。

プログラム

Program

ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン作曲
LUDWIG VAN BEETHOVEN(1770-1827)

交響曲第9番 二短調 作品125 「合唱つき」 Symphony No.9 in d-minor op.125 "Choral"

- 第1楽章 アレグロ マ ノントロppo, ウン ポコ マエストーソ
1 mov. Allegro ma non troppo, un poco maestoso
- 第2楽章 モルト ヴィヴァーチェ
2 mov. Molto vivace
- 第3楽章 アダージョ モルト エ カンタービレ - アンダンテ モデラート - アダージョ
3 mov. Adagio molt e cantabile - Andante Moderato - Adagio
- 第4楽章 フィナーレ, プレスト - アレグロ アッサイ
4 mov. Finale, Presto - Allegro assai

指揮者
Conductor

高橋直史



ソプラノ Soprano
林 正子

アルト Alto
穴澤ゆう子

テノール Tenor
湯川 晃

バス Bass
泉 良平



音楽監督 都築正道
Music director

合唱指揮 吉川 朗
Chorus conductor



管弦楽 春日井市交響楽団
KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA



合唱 春日井第九合唱団
KASUGAI CHORUS OF THE 9TH SYMPHONY

出演者紹介



指揮者 高橋直史

現在、東京芸術大学指揮科4年に在学中。愛知県立旭丘高校卒業後東京芸大指揮科に入学。日本オペレッタ協会や横浜シティ・オペラなど、オペラ公演の副指揮者をつとめる。この9月には芸術祭のオペレッタ「メリー・ウイドウ」を指揮して絶賛を博す。JTアートホール室内楽シリーズにも、指揮者として参加している。指揮を遠藤雅古氏に師事。また、指揮科特別講義においてワレリー・ゲルギエフ、若杉弘、岩城宏之の各氏から指導を受ける。昨年の春日井第九の副指揮者を見事につとめ、団員の熱い要望で今回の高橋さんを中心とする「学生第九シリーズ」が実現した。いま、最も未来を嘱望されている若手指揮者の一人。



ソプラノ 林 正子

現在、二期会オペラスタジオのマスターコースに在籍中。東京都出身。1994年東京芸術大学声楽科卒業。1996年同大学院修了。原田茂生、竹村靖子、ロレーヌ・ヌバー、ラウラ・ロンディの各氏に師事。学部在学中から、オペラ「魔笛」のダーメI、「ベアトリーチェとベネディクト」のベアトリーチェ、

「コシ・ファン・トゥッテ」のフィオルディリージ、オペレッタ「こうもり」のオルロフスキーなどに出演、コンサートではベートーヴェンの「第九」のソリストなどを務める。今年の10月から11月まで銀座セゾン劇場の「マスタークラス」に出演。安宅賞受賞。読売新人演奏会出演。1994年度国際ベルヴェデーレコンクール日本代表。日伊コンコロソ入選。



アルト 穴澤ゆう子

現在、東京芸術大学大学院修士課程在学中。二期会会員。愛知県出身。東京芸術大学音楽学部声楽科卒業。声楽を森明彦、三林輝夫の両氏に師事。二期会オペラスタジオ第38期修了。修了時に優秀賞受賞。これまでに、モーツァルト「レクイエム」、ヘンデル「メサイア」、ベートーヴェン「第九」等の

ソリストを務める他、オペラ「魔笛」のダーメ、「コシ・ファン・トゥッテ」のドラベッラ、「フィガロの結婚」のマルチェリーナなどに出演。バッハコレギウムジャパンに所属し、バッハ「教会カンタータ」、モンテヴェルディ「聖母マリアの夕べの祈り」等、数多くの演奏会にソリスト、アンサンブルのメンバーとして出演。



テノール 湯川 晃

現在、東京芸術大学大学院在学中。二期会会員、東京室内歌劇場会員。横須賀市出身。東京芸術大学卒業。二期会オペラスタジオ第39期修了。芸大在学中にヘンデル「メサイヤ」にテノールソリストとして出演。第3回ABC新人コンサートオーディションに合格、第111回神奈川県立音楽堂推薦音楽会

に出演。1994年3月に横浜市栄区の区民オペラ、ビゼー「カルメン」のドン・ホセ役でオペラデビュー。以後、R. シュトラウス「ナクソス島のアリアドネ」の舞踏教師役、E. カヴァリエーリ「魂と肉の劇」の知性役、一柳慧「モモ」の居酒屋二ノ役、芥川也寸志「ヒロシマのオルフェ」の死の国の運転手役で出演（いずれも指揮：若杉弘）。オーケストラ・アンサンブル金沢、岩城宏之モーツァルト全集「魔笛」のタミーノ役と、「後宮からの逃走」のペドリ口役で出演。コンサートの方では、ヘンデル「メサイヤ」、モーツァルト「レクイエム」、ベートーヴェン「第九」などに出演。声楽を湯川晃平、白幡武、高丈二の各氏に師事。



バス 泉 良平

現在、東京芸術大学大学院在学中。二期会会員。1969年、群馬県出身。東京芸術大学首席卒業（松田トシ賞受賞）。文化庁オペラ研修所第10期修了。高校在学中に第41回全日本学生音楽コンクール全国大会優勝。芸大オペラ「ラ・ボエーム」のショナールでオペラデビュー。その後、「ウィンザーの陽気な女房達」

のフルート氏に出演。またサントリーホールオペラアカデミーに参加し、グスタフ・クーン氏のもと「ラ・ボエーム」役人、そして「椿姫」ドビニー、「リゴレット」マルッコでは名バリトン歌手レナート・ブルゾン氏と共演。オペラ研修所修了公演では「ドン・ジョバンニ」のタイトルロールを演じ好評を博す。種井静雄、伊藤巨行、多田羅迪夫、和田みりの各氏に師事。



音楽監督 都築正道

現在、中部大学女子短大教授。春日井市交響楽団と春日井第九演奏会の音楽監督。1940年名古屋生まれ。名古屋大学文学部美学科卒業。関西学院大学院文学部博士課程修了。文学博士。朝日新聞音楽評や毎日新聞対談欄を担当。オペラトークの司会や講演会・海外のコンクールの審査員としても活躍中。主著に『楽劇：音と言葉の美学』（音楽之友社）『あくびなしの音楽講座：トスカ』（同）など。地元では、中部大学キャンパス・コンサートの解説、春日井市のピアノ・コンクールの審査員、フレッシュ・コンサートの委員、文化フォーラムのスタッフなどをつとめる。昨年の「ニューヨークによる春日井第九」など、内外の演奏家との交流を軸に、卓抜なアイデアと旺盛な実行力で春日井市交響楽団の活動と春日井第九演奏会を常に全国的な水準に保っている。

トレーナー 米津俊広 角堀雅信 中川さと子



合唱指揮 吉川 朗

愛知教育大学音楽科卒業。同大学院（作曲）修了。あけぼの合唱団、豊田ひまわりコーラス、大高北PTAコーラスを始め、名古屋オペラ協会、愛知県文化振興事業団などのオペラの正指揮、副指揮を務める。名古屋シティ管弦楽団の合唱団指導にあたっている。

名古屋芸術大学音楽部オペラ研究室実技補助員。

ピアノ伴奏(合唱団) 竹内理恵



オーケストラ 春日井市交響楽団

平成2年11月、春日井市初のアマチュア・オーケストラとして誕生。翌年創立記念演奏会を開き、毎年、春日井市民会館で多くの市民を集めて定期演奏会を行っている。今年7月の第5回定期演奏会には、指揮者に竹本泰蔵氏を、ソリストにナポリからピアニストのフランチェスコ・ニコロージ氏を招き、満席のファンの喝采を博した。春日井市制50周年記念の「春日井市民第九演奏会」には、指揮者の石丸寛氏の下、128名の大編成で参加して、初挑戦ながら難曲の「第九」を見事に演奏。その名を市の内外に広めるとともに、市民アマチュア・オーケストラによる「第九演奏会」の先鞭をつけた。団長の花村浩克氏（クラリネット）を中心にした60名の団員の活躍は、春日井市の音楽文化の顔として、ますますその重要性を高めてきている。今回の「第九」に対しても、トレーナーに米津俊広氏と角堀雅信氏を招いて技術向上に努めている。



合唱 春日井第九合唱団

平成5年12月の春日井市制50周年第九演奏会に出演した春日井市民を中心にして結成された合唱団。それ以降、毎年、200名の団員が春日井市民第九演奏会に出演している。指導者の吉川朗氏の熱心な指導と団長の荒川昭代さんとそれを支える優れたスタッフのチームワークの良さが、常に質の高い演奏を生み出している。「第九プレ・コンサート」の共演など春日井市交響楽団の姉妹合唱団としての性格ももつので、これからはさらに幅広い活躍が期待されている。

第九のお話

ベートーヴェンの「交響曲第九番」の終楽章について

「交響曲第九番」は、ベートーヴェンが47歳の1817年に書き始められ54歳の1824年2月に完成され、1824年5月7日にケルトナートール劇場で初演されました。プロシャ王フリードリヒ・ヴィルヘルム3世に捧げられました。ここでは有名な終楽章（第4楽章）についてお話ししましょう。

第4楽章は次の18部に分かれています。

1 「序奏」＝前3楽章の回帰・（とても急速に）二短調・3/4拍子：突然、大音響が鳴り響き、管楽器とティンパニによる序奏が始まります。前楽章の天国的な静けさを一気に破る激しく速い音楽で始まります。まさに混乱の極みです。ついで、この管楽器の騒然とした世界を鎮めるかのように低音弦のユニゾンが意味ありげに歌いだします。この旋律は、後でバリトン・ソロによって歌われる旋律と同じもので、声楽の登場が唐突にならないように前もって紹介しておく役割も果しています。そして、管楽器が前の3つの楽章の主題を次々に呈示していきます。この三つの楽章には、各々、第1楽章「戦い」・第2楽章「戯れ」・第3楽章「平和」といった象徴的な意味もあります。しかし、そのいずれをもこの低音弦のユニゾンが拒否します。「私たちが望んでいるのは、こんな激しい争いではない。だからといって、傍観者として皮肉っぽく世界を眺めている墮落者でもないのだ。また、現状に甘んじてなにもしない無力者でもないのだ」と、好戦的で破滅的で怠惰な人たちを非難します。そして管楽器群が4小節だけの「喜びの歌」を奏でます。やはり、この主題もチェロとコントラバスのユニゾンが同じように否定します。せっかく出てきた「喜びの歌」を否定するのはなんだかもったいないのですが、オーケストラのなかの管楽器だけがこの歌を歌ったからでしょう。ベートーヴェンは、はっきりと、管楽器の性格と弦楽器の性格を区別して、しかも各々を象徴的に使い分けています。例えば、出入りがはっきりしている存在感を強調する弦楽器は現実的な世界を、どこからきてどこへいくのか自由な存在である弦楽器は観念的な世界を現わしているのです。騒がしいお調子者の管楽器の調べでは、新しい理想の世界とはなりえないのです。そこで、待ちに待った全く新しい主題「喜びの歌」（第2主題）が現れます。先ず言葉をもたぬオーケストラによって、交響曲の形式を整えながら正式に登場してきます。

2 「喜びの歌」＝オーケストラによる主題の呈示（はなはだ速く）二長調・4/4拍子：24小節からなる「喜びの歌」の旋律が有節歌曲のように4回も繰り返されます。ソナタ形式で考えれば、「主題の呈示」を経て「主題の確保」に至る道であるといえましょう。また、あとで同じメロディが独唱や合唱によって繰り返されるので、交響曲のソナタ形式というよりも、声楽をソロにもつ協奏曲の主題提示部だと考えた方がよさそうです。ユニゾンのソロからフル・オーケストラまで、色々な楽器の組合せによって進んでいきます。同じメロディの繰り返しは、世界のあちらこちらから、このメロディに賛同する仲間が次第次第に増えていく様子を現すものです。音楽的には、主題が次第に説得力と影響力を得て、この交響

曲の主題の中心である「歓喜」へと充実していくことになります。いつ聴いても感動的です。

3 「ベートーヴェンによるマニフェスト」（とても急速に）二短調・3/4拍子：再び混乱が大急ぎ（7小節）で片付いた後、ベートーヴェンの言葉をバリトン・ソロが「おお、友人たちよ！」と歌い「喜びの歌」へとつながっていきます。「友人たちよ、このような調べではないのだ。もっと楽しく喜びに溢れた調べを歌い始めようではないか」。もちろんこれは、先のオーケストラのレシタティーヴォが否定した内容を言葉によって説明しているのです。「言葉で説明するのは非音楽的だ」などと簡単にいってはいけません。これから演奏される音楽の内容を前もって語っておく方法は、バッハのオラトリオやカンタータや受難曲のように、極めて伝統的なものであり、こういったカンタータ的な「主張をもった物語音楽」の導入にはなくてはならぬものでもあるからです。

4 「喜びの歌」＝声楽による主題の呈示（はなはだ早く）二長調・4/4拍子：ここで再び、第2主題である「喜びの歌」が呈示されます。このように主題が二度も呈示されるのは、交響曲では異例なことです。ですからここは、明らかに交響曲のスタイルではなく、声楽群をソロに見立てた「協奏曲形式」を取っているものと思われます。そのため、オーケストラとソロが主題を繰り返す、協奏曲特有の「二重呈示部」に当たるものと考えていいでしょう。この終楽章は、このことから、「ソナタ形式の交響曲」というよりは、「協奏曲形式のカンタータ」としての性格が強いものです。バリトン・ソロと男声合唱が歌います――「歓喜よ、美しい神々の火花よ。楽園から来た乙女よ。私たちは火に酔いしれて、神々しき者よ、あなたの聖所に踏みいる。あなたの魔力は再び結びつけるのだ。時流が鋭く引き裂いたものを。すべての人々は兄弟になる。あなたの優しい翼が広がるところに」。詩の内容は、共通の「歓喜体験」によって人類すべての心が熔けあって一つになるというのです。「溶ける」ではなく「熔ける」としたのは、歓喜が神の火花だからです。「歓喜は神々の火花であり、楽園からやってきた乙女だ。神々の火花によって、私たちが火のように酔うならば、そこで初めて歓喜の聖域に踏み込むことができるのだ」と歌います。シラーはさらにいいます、「人類の心は、もともと一つであったのだ。それが、戦争や飢饉や恐怖や独裁といった時の流れで、いままでの友が新たな敵となり、仲間が仲間を殺したり嘲ったり軽蔑したりするようになったのだ」と。それほど激しく憎み合い、もう修復が効かなくなった関係であっても、「歓喜はまた再び私たちの心をつなぎ合わせてくれるのだ。これを魔法の力と言わずして何とおおうか！」とシラーは人類の心の底に流れる歓喜の力を力説しているのです。

5 「第1変奏」＝4重唱・二長調・4/4拍子：「一人の友の友となる大いなる企図が成就した者や一人の優しい女性をかち得た者は、喜びの声に唱和しなさい。そうだ、この地上でただ一人でもその人の心が自分の物だと言える人は唱和しなさい。そしてそれができなかつた者は、泣きながらこの仲間からたち去るがよい。歓喜とはなにか――それは、この世で幸せを見つけたことをいうのだ、例えば、真の友だちを得た人、優しい女性と結婚した人、だれかに確かに愛されていると感じる人こそ、歓喜を知る人なのだ。もしあなたが、

このどれも知らないのならば、私たちの仲間になることはできない。涙を流して去っていきなさい。ここは、具体的に歓喜の内容を語っています。それは、「夫婦愛」と「友愛」です。アルトとテナーとバリトンが先に歌い出して、ソプラノがこの4行からなる「聯」の後半から入ってきます。ソプラノは、すっと立って、「私のような優しい女性を勝ち得た男たちは、うれしいと叫びなさい」といつているのです。女性であるソプラノが自分のことを自ら「優しい女性である」と宣言するのは、すべての女性の勝ち名乗りであるからです。これが、女性を勝ち得た男性よってさも自慢そうに歌われては面白くもなともないでしょう。このソプラノの自信と主体性と主張は、大いに尊敬すべきものです。それで、絶妙のタイミングを計って、2行遅れて歌いだすのです。

6 「第2変奏」＝4重唱・二長調・4/4拍子：「すべての生き物は自然の乳房に触れて喜びを飲む。すべて善き者も、悪しき者も、その薔薇のような香りに誘われるのだ」

7 「第3変奏」＝4重唱：「自然は私たちにキスとブドウと終生変らぬ友を与えてくれた。肉欲はウジ虫にくれてやった。そして天使ケルビムは神の前に立つのだ！」。歓喜といっても快樂ではありません。飲んだり食べたり、女の子と遊んだりといった欲望を満足させるための快樂なのではありません。そんなものは、ウジ虫にくれてやるがいい。神の玉座を守っている天使ケルビムは、快樂ではなく、真の歓喜を叫ぶ私たちを神に紹介するために神の前に立ち私たちを迎えてくれるのだ。

8 「第4変奏」＝4重唱を受けて合唱が同じ歌詞を歌います。二長調からイ長調へ、そしてへ長調の主和音に転調して、最後の言葉「神のみ前に」を、全合奏と合唱があらんかぎりの声と音で天にもとどけと歌います。激しい叫びが消え去ったあと、遠くから切れ切れに行進曲が聞こえてきます。そして、ゆっくりとこちらへ近付いてきます。

9 「第5変奏」（とても快速に、活発に、行進曲風に）変口長調・6/8拍子：ピッコロに大太鼓、シンバルにトライアングルが加わって、奇妙な音の行進曲を奏します。この騒然として異国風に行進曲は、明らかにトルコの軍楽隊を模したものであると思われます。トルコの軍楽隊なのは、異教徒の代名詞であり好戦的なトルコによって、寛容と思いやりである歓喜を理解しない人たちをからかっているのかも知れません。テナーのソロに先導されて男声合唱が勝利の歌を歌います。このメロディも巧みにアレンジされた「喜びの歌」であることがお分かりになるでしょう。革命の国の平和主義者ロマン・ローランは「これは戦う若い歓喜の賛歌、突撃への行進曲、もうひとつのマルセエーズだ」といつています。

10 「第6変奏」＝テナー・ソロと男声合唱による行進曲：これはまさに哲学者カントの倫理学そのものです。地球が太陽の周りを回り、宇宙のすべての天体が神から与えられた軌道に乗って肅々と運行しているように、私たち人間もまた、正義と寛容の軌道に乗って肅々と生きるべきなのです。「進め、天体の壮麗なプランにそって太陽が動くように喜ばしく。進め、兄弟たちよ、あなたの道を勝利に向かう英雄のように喜びにみちて」。ソロとコーラスが終わったところから、トルコの異様な行進曲の気分を受けつい、オーケスト

ラだけによる長い後奏（110小節）が始まります。テンポも崩さず、エネルギーも維持したままで、次第に、にがく苦しい音楽へと変わっていきます。それはまるで私たちをこの快樂の俗世界から聖なる神々の国へ連出さんとするかのように激しい音楽です。クライマックスを過ぎると、目的地を前にしたかのように、その歩みも段々慎重になり遅くなっていきます。ホルンの響きだけが、いつまでも足踏みするように余韻を繰り返しています。すると突然、弦楽器とオーボエがクレッシェンドして、二長調で最強音の大合唱による「喜びの歌」が始まります。これまで暗黒に支配されていた世界に、パッと太陽の強い光が射すように、人類の理想の訪れを象徴的に示すものでもあります。第5交響曲のハ短調の3楽章からハ長調の4楽章へ、劇的に変わるシーンを思い出させます。そうです、これもまた、ベートーヴェンのモットーである「苦悩を通して歓喜へ」なのですから…。

11 「喜びの歌」＝再現部・二長調・6/8拍子：合唱――「歓喜よ、美しい神々の火花よ、楽園から来た乙女よ、私たちは火に酔いしれて、神々しき者よ、あなたの聖所に踏みいる。あなたの魔力は再び結びつけるのだ、時流が鋭く引き裂いたものを。すべての人々は兄弟になる、あなたの優しい翼が広がるところに」。最初の「喜びのテーマ」が、今度は完全な形となって声高らかに歌われるので、親しい友人がたくましく成長してまた戻ってきたような爽やかな感動を覚えます。ここでの歌は単純なコラール（讃美歌）の形式を取っているので親しみやすく、あなたもお聞きになっていて、言葉も良く分り、詩の内容にたいする理解も、より深まることと思います。弦楽器群の伴奏も、8分音符の素早く上下するユニゾンでパロック風の単純な音型です。フェルマータのついた休止の後、全く新しい主題（第3主題）が登場します。「抱擁の主題」です。

12 「抱擁の主題」＝呈示（やや遅く、威厳をもって）ト長調・3/2拍子：「抱擁の主題」による短い合唱曲です――「抱き合おう、百万の人よ！ この口づけを全世界の人に！ 抱き合おう、百万の人よ！ この口づけを全世界の人に！ 兄弟たちよ！ 星空の上には一人の父が住みたまうに違いない」。力強い男声のユニゾンが主題を呈示します。その後、全合唱が優しく反復する形となります。この聯の韻だけは他の聯の韻と大きく違っていて、[a/b/b/a] になっています。[a] が前後にいて、[b] を抱く形、すなわち『抱擁』を現す「包韻」です。弦楽器が不規則な激しいリズムで迫りますが、コーラスが終わると新しい場面へ私たちを導いていきます。

13 「懐疑の主題」（ゆるやかに、急がないで、敬虔に）ト短調・3/2拍子：宗教的な深さをもった聖なる賛歌です。とても静かで厳かな前奏のあと、コーラスがト短調の和音を暗く響かせます。合唱――「ひざまずくのか、百万の人よ？ お前は創造主を予感するのか、世界よ？ 星空の上に彼を求めよ！ 星々のかなた、彼は必ず住みたまう。星々のかなた、彼は必ず住みたまう」。メロディーは7度下降する印象的なものですが、これは「ひざまずく」という動作を示しているのでしょうか。また「百万の人よ？」とか「世界よ？」とか疑問を投げかける時には、メロディーも語尾を上げる疑問形になっています。この箇所は、神の存在を問う場面、ベートーヴェンとシラーの主張を伝える一番重要なところですよ。

春日井市民の新年の話題は「今年の第九」

例えば、「春日井の第九」はこんな第九でありたいと思っています——ステージでお母さんが歌っている、客席であなたとお父さんと妹が一生懸命になって聴いている。演奏会が終わりました。会館の前で待っていると、頬を赤くしたお母さんが走ってやってきます。「どうだった？」と訊くお母さん。「とっても良かったよ」と三人。それからご機嫌なみんなそろってハンバーグを食べに行く…。年末になって、今年もまた恒例の「春日井の第九」を家族揃って聴く幸せをみなさんに感じていただきたいのです。そう、「年越し第九」です。

また、「春日井の第九」といえば、いまだにあのときのことを強烈な印象と共に思い出す方も多いでしょう。春日井市制50周年記念に行われた「春日井第九演奏会」のことです。会場は総合体育館。指揮は石丸寛、東京から招いたソリスト、128名の市民オーケストラ、300名の市民合唱団、3,600名の春日井市民。そして、アンコールは会場の全員による歓喜の大合唱——。これは最大級の「全市民参加第九」でした。

その翌年は、俊英竹本泰蔵氏の指揮による春日井市交響楽団と春日井第九合唱団と地元ソリストによる家族的な雰囲気第九でした。そう、これは「親愛第九」でした。

そして昨年。ニューヨークからやってきた指揮者と4人のソリストによる戦後50年の春日井第九は、いつになく華やかで国際交流の実を上げました。これは、春日井が日本を代表した「日米親善第九」でした。

今年は、音楽大学の学生の新鮮な感性が明日を歌います。私たちのこれまでの劇的で文学的な第九が、純粹で機能的な第九となって新しく生まれ変わることでしょう。そう、これは「新世紀第九」です。

「春日井第九」は常に変化を求めています。それが可能なのはベートーヴェンの「第九」そのものが多くの解釈を内に秘めているからです。そして、春日井市民が絶えず新しい価値を追い求めているからです。私たちが幸せな明日の創造に向かっている限り、何年、何十年、「第九」を歌い継いでも決してその魅力と意義はなくなることはないでしょう。

例えば、元旦のお餅を食べながら、「さて、今年はどんな第九かな？」とみなさまの新年の話題になるような、そんな第九でありたいと思っています。

(都築正道)

管(フルート)と弦(ヴィオラ)とコーラスとがユニゾンになり、この「問い」が、単純ではあるがみんなにとってのっぴきならぬものであることを示しています。この場合、ベートーヴェンの晩年の様式が、音の簡潔さと内容の深さを、すなわち、精神的な面と感覚的な面を同時に現すのです。伴奏のオーケストラは、高い音域で天国的な和音を響かせて、「星々のかなた、彼は必ず住みたまうのだ」と言う、詩の語る情景を美しく伝えています。そして、フェルマータで澄んだ星空を一瞬私たちに見せてから音楽は一気に佳境へ進みます。

14 「2重フーガ」(快速に激しく、常に音をはっきり出して)ニ長調・6/4拍子:「喜びの歌」と「抱擁の主題」による2重フーガです。「2重フーガ」は、フーガの主題が二つあって、各々の主題が各々のフーガを展開していく形式です。その結果、二組のフーガが同時に歌われる複雑な音楽になります。でも、ベートーヴェンは、この複雑な形式の音楽によって、別々の内容を持った二つの詩句「ようこそ、百万の人よ!」と「歓喜よ!」を結びつけるのに成功しています。かくて、「万人による歓喜の歌」というベートーヴェンの理想がここに実現するのです。これは、精神的な地平でのみ可能と思われる、極めて形而上的な現象で、哲学者でも羨むほどの見事さであると申せましょう。正に、音楽の叡智の、哲学に対する勝利を物語るものといえます。2重フーガは、ソプラノの歌う「全世界の」でクライマックスとなります。その力強さも澄んだ美しさは、全曲中の圧巻です。そればかりではなく、ベートーヴェンの全作品の中でも「最も精神的に偉大な音楽である」と言ってもいいでしょう。

15 「懐疑の主題」=変奏:2重フーガがフォルティシモで終わると、突然、バス・パートが再び「懐疑の主題」を歌い始めます。この変奏曲は、あとは疑問符を伴う疑問形なので語尾を極端に上げて歌われます。それに、今回の「懐疑の主題」は、途切れどきれの旋律で歌われるので、前回のまじめな調子と違って、なおさら百万の人と世界をからかうような皮肉っぽい口調になっています。むろん、ベートーヴェンは、ここではひざまづくことを懐疑的にあつかっています。それを、同じようにテナーで受けつぎ、このメロディーをアルトに廻します。次々に転調もします。そして、全合唱がコーラルを歌うホモフォニーになると、今度は一転して「父なる神」を賛美する崇高な響きになります。神といっても、啓蒙主義者でフリーメイソンリーでもあったシラーのことですから、ここではキリスト教の神をいうのではなく、「理神論的な神」、すなわち、地球が太陽の回りを回る天体の運行のような「絶対的な真理」を言っていると見るべきでしょう。合唱——「お前は創造主を予感するのか、世界よ? 星空の上に彼を求めよ! 星空の上に彼を求めよ! 兄弟たちよ! 星空の上には一人の父が住みたもうに違いない」。とても静かなコーラルです。ピアノシモでト長調のハーモニーを長く伸ばし、2重フーガの興奮を静めます。合唱のハーモニーは、ト長調の主和音の第3音(ドミソのミの音)を欠いていて、ここでも「空虚5度」が使われています。

16 「第7変奏」=4重唱(快速に、ただし控え目に)ニ長調・2/2拍子:テナーとバリトンの男声ソロ群と、ソプラノとアルトの女声ソロ群が簡単なフーガを作ります。弦楽器が静かな前奏を奏します。波のうねりのように滑かに素早

く動くパッセージですが、歌の部分になりますと、一斉にA(ラ)の音しが奏かなくなります。4重唱——「歓喜よ、楽園から来た乙女よ……」。4重唱の興奮を受けて、後半に合唱も加わります。大きな大きなクレッシェンドとなって「すべての人々」という言葉で頂点となります——「あなたの魔力は再び結びつけるのだ……」。途中で4重唱は合唱に席を譲ります。そして「人々は兄弟になる」という箇所では、合唱はだんだんゆっくりになり小さくなっていきます。そして静かに感情を込めて「あなたの優しい翼が」と歌うのです。その「ザンフトル」という言葉が、とても「優しく」響きます——「すべての人々は兄弟になる。あなたの優しい翼が広がるところに」。再びアレグロに戻って、管楽器だけによる静かな間奏(4小節)の後、合唱が早いテンポで急速にクレッシェンドしながら「喜びの歌」の後半を繰り返します。

17 「第8変奏」合唱——「あなたの魔力は再び結びつけるのだ……」。4重唱も加わって「すべての人々…」の短いかけあいとなりますが、再びボコ・アダージオになると、今度は合唱が4重唱に席を譲ります。この4重唱はとても美しいアンサンブルとフーガです。ソプラノが「あなたの優しい翼が」と、まるで軽い羽根を付けてゆっくりと優雅に舞うように歌います。それをアルトから順に低い声部へと、少しずつ飾りを加えながら真似ていきます。特に、最後を飾るバリトンが、低い嬰へ音から高いホ音まで2オクターブ近い音域をうねりながら上がっていくところは絶品です。4重唱——「すべての人々は兄弟になる、あなたの優しい翼が広がるところに」。最後の音がニ長調の主和音で長く静かに伸ばされて、いよいよ曲の最後であるコーダへ入っていきます。

18 「コーダ」(きわめて早く)ニ長調・2/2拍子:次第に高潮していく弦楽器に乗って、全オーケストラがとても早い行進曲へとなだれ込んでいきます。トライアングルもシンバルもバス・ドラムも加わった、陽気で力強い終曲です。コーラスが終始全体をリードして、全曲を飾るにふさわしい「閉幕の合唱」を歌います。しかし、祝祭的な華やかさと同時に、不安感を内に秘めた慌しさも強く感じさせる不思議なフィナーレです。合唱が「抱き合おう、百万の人よ! この口づけを全世界の人々に!……」。「全世界の人に!」となんども繰返しますが、最後はやはり「喜びの歌」が登場してきます。「歓喜よ、美しい神々の火花よ」。最後の疾走に備える助走のように、一度マエストロ(荘厳に)にテンポを落とします。合唱——「楽園から来た乙女よ、歓喜よ、美しい神々の火花よ」。そして、冒頭と同じ大混乱の中、合唱の最後の言葉「神々の火花」の消え去るのを待たずに終曲のプレスティッシモへ入り、全曲の幕が一気に降ります。

この「交響曲第9番」が、ベートーヴェンが私たちにあてた「福音の訪れ」であるのならば、生きる喜びと生きるに値する世界を教えてくれたこの曲を聞きながら、年の瀬を送り新しい年を迎えることは、とても意義のあることのように思えるのです。

(都築正道・音楽監督)

みんなで歌おう、春日井賛歌を…

< 歓喜の歌 >

作詩●なかにし礼

1、あ い こ そ か ん き に み ち
2、ケ ダ カ キ オ ト メ ヲ カ チ

び く ひ ー か り さ え き ぎ る
エ タ モ ー ノ ヨ テ ヲ ト リ

く な ん を こ え て す す ー ま
カ シ コ ノ サ ケ ビ ラ ア ー ゲ

ん ヨ カ ニ ん キ の い た ー だ り き
ヨ ニ シ め た と き わ ー れ
ナ ニ ー ガ デ タ キ ヲ ア ー イ

ら は き よ う だ ー い セ か い は ひ ー と
ナ キ コ ド ク ー ノ セ ヒ ト ハ タ チ ー サ

つ か ん き の い た ー だ り き ふ み ー
レ ニ シ め た と き わ ー れ
ガ デ タ キ ヲ ア ー イ ナ キ コ ド

だ ー い セ か い は ひ ー と つ
ク ー ノ セ ヒ ト ハ タ チ ー サ レ

1. 愛こそ歓喜にみちびく光
さえぎる苦難を越えて進まん
歓喜の頂^{いただ}き踏みしめた時
我らは兄弟世界は一つ
歓喜の頂^{いただ}き踏みしめた時
我らは兄弟世界は一つ

2. 気高き乙女を勝ち得たものよ
手を取り歓呼の叫びをあげよ
人間一人で何が出来よう
愛なき孤独の人は立ち去れ
人間一人で何が出来よう
愛なき孤独の人は立ち去れ